

アカデミア メランコリア (第29回) (若手のコラム)

水産研究・教育機構 水産資源研究所 伊藤 大樹

今回コラムを担当することが決まって、その始まりを知るためにニュースレターをさかのぼってみた。当時の津田編集委員長からコラムの開始が宣言されたのは2013年5月のことで、そこには「若手からアカデミア・メランコリア(憂鬱な学問)の現状を打破したいという『熱』のようなものを感じたい」と語られていた。

東北大学大学院で学位を取得後、水産機構の研究員となったこの3年間は、年に4-5回のペースで調査航海に乗船している。昨年度からは航海の計画・実施を主体的にするようになって、学ぶことの多い毎日を過ごしている。航海中、とれたてのデータを図にして眺め、興味深い構造や現象がみえると興奮する。さらに踏み込んで解析すると、あと少しでもっとおもしろい結果がみえそうだと、というときがある。頭をはたらかせて手を動かしていると、体が熱くなってきて、結果が出たときには思わず歓声をあげてしまう。この興奮は、学生時代から現在まで、研究室や調査航海などで出会った先生や先輩から教わったものだ。私の眺める図をのぞきみて、私の思いつかない考え方や解釈を話してくださった。そのとき伝えてもらった研究に対する彼らの熱が、こうして私も研究に携わるきっかけになっている。

観測データにはいつまでも臨場感がある。陸に戻って解析や議論をしているとき、洋上での興奮を思い出して、また熱くなることがある。ある報告の場で、「データへの愛が溢れすぎて、まるで子どもの話をしているみたいだよ」と指摘されたことがある。思い返せば、確かに気持ちが入りすぎることがあるようだ。熱意は良いかもしれないが、データをみる目は客観的であるべきだと反省した。一方で、成果を文章にまとめるとなると、また違った熱が出てくる。メランコリーな熱とでもいおうか。本来データがもつ熱を、うまくおもてに出してやれない。書き消しを繰り返し、どうしても説明が下手なのだろうと嫌な汗が出てくる。不得手などと言ってはられないので、訓練と経験を積み、慣れていきたい。

さて、この文章を書くいまも、私は洋上にいる。岸から離れると、周りは当然海と空だけになる。その景色は案外すぐに見慣れてしまうが、私の場合、それを見飽きることはない。研究を抜きにしても、水のうごきを見ること自体が好きらしい。絶えず伝わってくるうねりを眺めていると、海が一つの巨大な生き物のようにみえて、その上に浮いているのが不思議に感じられる。そして、凪いだ夜。「舷側に足をかけて、ひょいと降り立ち、歩いていけそうな気がしてくる」というのはある先生が語ってくれたエピソードだが、穏やかな夜の海をみるといつもこれを思い出し、確かにそうだと納得する。執筆現在の海は、厳冬期を冠するにふさわしい荒れ具合だが、この力強さもまた、眺めているとおもしろい。

体温を測る。平熱だ。今年度になって、私たちの生活はこれまでと大きく変わった。いままでよりずっと、熱を意識するものになった。環境問題や社会動向などを背景に、海洋環境や水産資源に関わる調査・研究の到達目標も変わっていくが、自分が楽しいと思える場所に身を置き、そして、新たな発見をしたときの熱は忘れずにもち続けていたいと思う。ときには気のふさぐこともあるが、結局のところ、楽観的な性格なのかもしれない。洋上でもどこでも、ひとりで盛り上がり出して出した熱が、いつかどこかに伝わって、何かが変わらないとも限らない。

